市民と市長の対話集会
「つながるまち、小郡」を語ろう！

平成２９年８月９日（水）
午後７時～午後８時３０分
立石校区公民館

意見交換議事録

質問者Ａ：　先ほど、市長のマニフェストの話にあった体育館建設についてお尋ねしたい。聞いたところ何か負の遺産になるようなことを言っていたが、小郡運動公園の設置はかなりお金がかかったと思う。ただ、今の段階であれは負の遺産なのか。そうではないと思う。今、甲子園に行くために高校球児が頑張っていて、日本にたくさん小郡球場の名前が流れている。小郡市の知名度を上げるのにとても役に立っていると思う。それは、負の遺産になっていないと思う。体育館建設に４０億円かかると言われた。維持費にもすごくお金がかかると言われた。それは、あくまでそういう効果的なことを考えていないからではないかと思う。むしろ大きな施設を作って、国際的な大会ができるような施設を作って、交通の便が良いと先ほど市長が言ったので、そういうところを使って、小郡市は福岡市から３０分ほどで来られるので、福岡市で行われる国際大会に乗っかる形で、同じような大会を一緒にしたりすればかなり収益があがることも考えられる。なにより小郡市の知名度を上げるために、小郡市の誇りとなるために、そういうものにもできるのではないかと思う。スポーツをしている者として、負の遺産になるのではないかという言葉が少し気になった。そういう、小郡の知名度を上げるためにとか、野球場と同じように頑張っていこうというところはないのかと気になった。

見城副市長：　実は、私も体育会系で、福岡県のスポーツ少年団の本部長もやったり、福岡県の体育協会で長年スポーツに携わってきたので、スポーツ施設の重要性というのはよく分かっている。問題は、スポーツ施設がその子どもたちを、あるいは地域の人たちを、あるいはアスリートを、どのような形で育てていくような施設にするのかという、ここのマッチングだと思っている。だから、今言われたように国際大会ができるような体育館を作ろうじゃないかということになると、国際大会を誘致して、そしてそれを見た子どもたちが、あるいは地域の人たちが見て、スポーツに親しんで、アスリートが育っていくと、こういう好循環が生まれてくる。そういう施設を目指すというのもある。あるいは、今、地域でいろんなサークルで頑張っている人たちがいる。この人たちが交流して地域の活力

を生み出していくという、いわゆる内向きだが、それが小郡の力になっていく、スポーツを通して力になっていくというような、体育館のありかたもある。だからどの体育館を目指していくかということを、今から皆さんと一緒に話し合っていきたい。

国際大会の話をされたので、一つだけ申しあげると、国際大会をするためには公認をとらなければならない。そうすると、器具の一つ一つに毎年公認料を払っていかなければならない。そんな体育館を持っているのは、久留米市と福岡市と北九州市にある北九州総合体育館のこの３つしかない。そんな体育館を作らないと言っているわけではないが、そういう面もあるということである。

それから地域の皆さんのための体育館もある。小さなことをいうと、エアコンを入れるか入れないかというのも議論の対象になる。エアコンを入れると１時間に使う体育館の使用料は８０００円くらいになる。そうすると２時間使うと１万６０００円。これは、中学校の中体連だと使えない。エアコンを使う時期が７月から８月。申し訳ないが、その間は高齢者の皆さんはちょっと控えていただいて、夏休みの間、中学生や小学生、エアコンが無くても元気な子どもたちに使ってもらおうじゃないか。そのような体育館の考え方もある。だから、そういうことを話し合って、さっきも言ったように、体育館のコンセプトを作って、そのコンセプトから何が生まれていくのか、そしてスポーツから小郡市がどう活力を生んでいくのか、ということを皆さんと一緒に考えていきたい。

それから加地市長が言ったのは、今までは体育館に入ってくる収入というのは使用料だけ。でも野球場を見ると、広告収入が入っている。あれと同じように、体育館を使って、少しその使用料とは違った形で収入を得て、それを体育館の維持管理費に回していく。そうすると税金から回していくお金が減るから、その分を高齢者対策だとか子育て支援策とかそういうものに使えるのではないか、そういう考え方をもって、施設づくりを皆さんと一緒に考えていきたい。どうぞ、それぞれ、皆さんご意見がたくさんあると思う。多分大きく異なることはないと思うが、それらを集約しながら、小郡市の次の総合体育館づくりを皆さんと一緒に行いたい。

質問者Ｂ：　子どもの貧困は６人に１人と言われている。学力格差は親の年収に比例していると言われている。全国小中学校で学力テストが行われているが、結果として福岡県は平均以下。県内６０の市町村の中で、平均点以上は小郡、春日、糸島、宗像の４市。子どもたちの努力結果で素晴らしいことだ。学び場支援事業が、１０年前に一部の小中学校で取り組まれてきたが、５年前から全ての小中学校で始まっている。小学校では「ＢＢクラブ」、中学校では「チューター」。ＢＢとは、遊びの「び」学びの「び」からきている。ＢＢクラブではまず１７時まで、思い思いに学年が一緒に遊ぶ。１７時以降は、自学自習と事務局作成のプリントに取り組む。１０年目でやっと結果が出始めている。子どもたちは全てにおいて宝物。今も、市として前向きに対応してもらっているが、全ての子どもたちが貧困や親の収入に関係なく、学力をつけ自分に自信をつけ、進路や夢や希望を実現して

ほしいと願っている。遊びの環境を良くしてほしいと思っている。５年前にＢＢに入ってきた子どもは、４年後は１８歳になり選挙権を有することとなる。よろしくお願いしたい。

清武教育長：　言われたように、経済格差が子どもの学力格差に結びつくと、そういう社会になったらいけないと思う。小郡の場合は、学力も上げているが、学力と体力と道徳性、心だが、この３つを鍛えて３つの向上を図ろうとしている。だから学力はもちろん、体力も、強い心も一緒に合わせていきたい。それから、学び場支援事業だが、これがなぜこれだけできたかというと、地域の皆さんの協力のおかげ。中学校のチューターでいうと、立石校区の中学校のチューターは、立石中学校の卒業生が教えてくれる。だから、その先輩が教えてくれる勉強を、一生懸命学びながら力をつけて、自分たちも大きくなったら今度は後輩に伝えようという伝統が立石にはできている。力強い教育の連鎖というか、伝統が受け継がれているのも立石の非常に良い所であるし、それができているのは今日来ている皆さん、立石の地域の方が、子どもたちに力をつけよう、夢を持たせよう、将来の進路を開こうという思いで、支援いただいているからだと思う。立石小は少数だが精鋭だ。しっかりこれからも支えていくので、皆さんの今後の協力をなお一層お願いしたい。

質問者Ｃ：　先ほど市長の８つの柱の中で、７番目、立石校区の小学校の少子化のことを言っていた。それに対して立石校区は、個人的に思うのは、小学校１年生は１７人と、１１０年の歴史の中で一番最低だと思う。中学校にいたっても、二十何人１クラス体制。ただ良い点もある。小学校で、先生、職員が皆、全員の子どもが分かる。また、立石校区には市営住宅が２か所ある。２年後に第二市営住宅が新築されると聞いているが、さきほどの説明の中で、子育て世代という言葉が何度も出ていたが、そういう方に優先して入ってもらうというのが、一番手っ取り早い解決策だと思う。

清武教育長：　立石の小規模校は、確かに児童数は減っているが、今言われたように、小学校に関しては、全部の先生が全部の子どもを覚えて、全部の教員で全部の子どもを育てるという体制でやってもらっているし、一人ひとりの子どもにしっかり指導の手が届くということができている。だから授業する場合も、必ず１人ではなく２人の先生が入って、一人ひとり力がつくような支援をしている。

　中学校に関しては、この立石校区の区長さん方と話をして、平成２０年から通学区域の弾力化というのに取り組んでいる。これは小規模校の立石中学校と宝城中学校。１０年になるが、これまで三国校区から、また大原校区もだが、三国校区から立石中学校に入学した子どもが合計６１名。宝城中学校は２５名。その６１名の中には、兄弟姉妹がいる。立石に行ったら、小規模だが本当に丁寧な指導をしてくれる。子どもたちのあいさつの元気な声を聴いたら、保護者がものすごく喜ぶ。こんな学校が今、日本にあるんだと。ぜひ自

分の子どもをやりたい、と。お兄ちゃんお姉ちゃんがいたらそのことを聞いて、妹弟が行くということで、現在もこの通学区域の弾力化で立石は非常に人気がある、というか継続的に要望が続いている状況だ。だから、こういうのは維持しながら、小規模校の良さを一歩進めるために、中学校は去年から、「本物講座」といって、伝統文化の講座を新しく始めている。外部の先生に入ってもらって、お茶、囲碁、そして生け花、そういう伝統文化をこの立石中学校を卒業した人は必ず身に付けて卒業する。これは宝城中も同じ。そういう付加価値をつけて卒業してもらう。

それから今年の４月から、中学校には通学区域弾力化でたくさん入ってきたので、新しく教員を１名加配して、なお教育活動が充実するような支援もしている。小学校の方も、今言われたような、人口増にともなう児童の確保とともに、教育活動の特色化、人的なものを含めた支援を今後も進めていきたい。それを進めるに当たり、大事なのは地域の皆さんの応援なので、今後ともよろしくお願いしたい。

肥山都市建設部長：　子育て世代の市営住宅への優先入居はどうなのかということだが、これは都市計画課が今、市営住宅の建て替えを計画している。現在の井上第二住宅になるが、実は市営住宅がもう一つ建て替えに入っていて、西鉄電車横の自動車学校の反対側に若山住宅というのがあるが、こちらも老朽化しているので、これ２つを合わせて立石の井上の方にまとめて建てたいと考えている。戸数でいうと、まだはっきりしていないが、６０戸～７０戸くらいを計画している。その中で、子育て世代の優先入居のことだが、これはいろいろ規制があって難しいところはあるが、現在の規制や要綱を少し変えて、また住宅の間取りを子育て世代が入りやすいような部屋をいくつか設けながら、検討していきたい。本年度から、地質調査に入る予定。平成３２年を完成目標に事業を進めていきたい。

質問者Ｄ：　一つは、ホームページの改正をやってほしい。非常に見にくい。

もう一つは、先ほど中学校区が５校区といったが、こう見たら部長級が５人いる。私たち市民が市役所に行くのは年に１回か、ないかくらい。そういうな中で意見を聞くというのは非常に難しいと思う。今日、市長が来てこういう集会は初めてだと思うが、逆に市の方から、職員を、例えば各自治区では年１回総会をやっている。そういう場というのは、意見を聞く良い場所じゃないかと思うので、そういう所に市の職員を派遣してもらって意見を聞いてはどうか。

大津総務部長：　ホームページの改善については、今年検討の俎上に載せている。というのも、障がい者にも優しい視点でのホームページというところもある。これは、全国的にそういった取り組みをしているので、本市においてもそういった取り組みも含めたところで、ホームページの改善に向けて、本年検討をしているところである。来年というわけにはいかないかもしれないが、近々そういった方向性を出して取り組んでいきたい。

総会への職員派遣の件だが、皆さん方の、特に自治会の関係については、当然ご了解いただいていると思うが、区長さんという存在がある。そちらとの連携については、協働推進課を介して常々連携をとっていると思っている。そういった面では、区民の方のいろんなご意見などが区長さんを通じて私どもの方へつながっていくと認識している。また、いろんな意味で市役所にご意見、苦情といったものも直接的に届けてもらえれば対応していきたい。

見城副市長：　市長は、協力して働くではなくて共に働くという共働のコミュニティーを作っていきたいと先ほど述べた。共に働くということは、まさに我々職員と地域の皆さん方が共にということ。パートナーシップの関係になるので、また何らかの形で、そういう形の仕組みを作らなければならないと思っている。今、具体的にこんなことをするとは言えないが、必ずどこかの時点で、こうやってパートナーシップで、地域を、あるいは行政を動かしていくというそんな仕組みを提案したいと思うので、お約束する。

質問者Ｅ：　井上第二住宅のことが出たが、子どもたちも皆、まちに出て行ってしまって、６０代７０代ばかりなのが現状だ。住宅の建替工事に当たって、私が今いるところは、「駐車場にはなるから動かなくていい」と。別の友達の方は、「そこはダンプやらが通るから立ち退いてください」と、同じ住宅でもちょっと揉めている。「あんたたちは出らんでよかけんよかの」と。「自分たちは建つまでの間はどっか行かなんとばい。引越し費用は出るが、敷金は俺たちが払わなん」とかちょっと揉めている。こういう集会で、たくさん来ているから１人２人ものを言うといってもなかなか取り上げられないので、加地市長が言ったように時間が許す限り、皆さん忙しいと思うが、どうぞ市民と皆さんと対話をして、小郡を変えるということに私たち市民も賛同したい。私ももう７０歳になる。交通機関については、昔は乙隈経由とかのバスがあったが、今バスがなくなってしまった以上、住宅ができても足が無い。今は自分で車を運転しているが、そういうことをどう考えているか聞きたい。

肥山都市建設部長：　市営住宅の建て替えの件、まず井上第二住宅は大きく敷地が真ん中くびれで二つに分かれている。その片方に新しい住宅を、４階建てとか５階建てとか、建てたいと思っているので、そこに住んでいる方たちが、一度他の市営住宅とか他のアパートとかにまず移動をお願いしますという形でお話をしている。どうしても、片方を崩さないといけないものだからそういう対応になる。ただ、引っ越し代や敷金の問題は、市の方でそういう不公平が出ないような形で負担をしていきたいと思うので、詳しいことは都市計画課が担当になるので、聞いていただきたい。

黒岩環境経済部長：　交通機関ということで、立石校区にコミュニティバスを走らせてい

るが、昨年度、市民の方にアンケートなどを取る中では、非常に使い勝手が悪いと。例えばイオンや病院とかにバスを使っても、帰りがないから迎えに来てもらわなくてはならないとか、非常に便数が少ないとか、そういったアンケート結果が出ている。市内全体を含めたところで、現在バスルートの見直しなり、乗継なり、もっと便数を増やすなり、そういったことについて、いろいろな意見や案を出しているところである。また、先ほど市長からも出ていた自治会バス。希みが丘、美鈴が丘、あるいは御原校区は地域の皆さんの力を借りて、そういったバスでも更に補てんしてもらって、市民の皆さんがいろんなところに行けるように、そういった体制の相談を積極的に受けている。立石校区からも、市の方に、そういった相談がいくつか来ていると聞いている。ぜひご相談願いたい。

【以下、質問者多数のため一度にまとめて質問を受け、一括して回答する。】

質問者Ｆ：　マニフェストが８つあるが、この８つを各部長がどのように推進していきたいかということを広報に出してほしい。それによって我々が批判するところは批判していく。そうやっていかないと、市長が１時間しゃべっても何にもならない。

質問者Ｇ：　花立山の南側の道路、筑前町と本郷基山線の間の幹線を作ってほしい。今、久光花立線というのがあるが、あれの周囲とかではダメだと思う。筑前町の部分は、既にできている。この一本が整備されるだけでも、立石校区だけでなく、小郡は格段に良くなると思う。そしてこのつながるまち小郡の実現に必ず役に立つと思う。

質問者Ｈ：　今回「つながるまち小郡」の８つの柱ということで、一番の、市民のみんなが主役のまちづくりというのが根底にあると思うが、このような対話集会はなかなか２０代３０代もしくは１０代の世代の人が足を運ぶことがない。それはそういう世代が知識もないし、市政に対する意識が低いというのもあると思うが、やはりそのような世代の意見も大事だと思うので、そのような世代の意見もぜひ引き出してもらいたい。また対話集会もぜひ開いてもらえたらと思う。

質問者Ｉ：　市長が言った、小郡は交通の利便性が強みだということは、まさにこの立石校区もインターがあり、レールバスがあり産業道路ありで、その面では非常にポテンシャルの高いところだと思っている。しかし、まだ現状は、発展途上地域で、やっとインター周辺に流通団地や干潟の工業団地ができて、そういった業界から注目されているのは事実だと思う。しかし、先ほどの小中学校の児童数の減少もあるように、やはりどうしても農業振興地域と市街化調整区域の２つの指定が、余りにも立石校区にかかりすぎている。昔は、立石は農業地域で良かったが、インターができ、時代も２１世紀になればいろいろ変わってきている。住宅建築については、都市計画法第３４条第１２号が今隈地区に適用さ

れて、非常に努力しているが、やはり排水と排水溝の整備の関係で非常にハードルが高い。今隈には石原川が、立石校区には鎗巻川があり、河川改修を今後お願いしたい。そうすれば都市計画法第３４条第１２号も各地域に適用されて、外部からの住民が入ってこられると思う。今、徐々に下水、上水のインフラ整備が進んでいるのは良いことだと思うし、早く校区全体に実現してほしいと思うので、よろしくお願いしたい。

質問者Ｊ：　６月下旬に農業委員会の立石地区会議があったときに、農業委員会事務局長から遊休農地があったら集めて企業誘致を図りたいというような構想があるという話があった。それは新市長の話かと聞いたら、そうだということだった。企業進出を全国でやっているが、日本農業新聞の資料によると、半数以上が撤退していると、設備費の大きさとかかる経費の多さで。本当に利益を上げている企業は、確か１４％か１７％でしかないと。こういう現状がある。この立石地区は人口減少地帯でもあるが、農業の意欲は高いところだから、新規就農者を募って、きちんと指導していく、また、定年帰農者をいろんな機関で育てていく。そのためには、ＪＡみいとしっかり話したうえで、話を進めてもらいたい。

質問者Ｋ：　小郡はまちづくりが下手だと思う。まちが貧弱。まちにもっと街路樹や植木を植えてもらいたい。植木を植えるにはお金がかかるので、良ければ、死んだ人が香典返しとして、例えば植木が１本１万円するならば２万円くださいと、そうしたら市で向こう５０年間その植木については面倒をみるようにする。その植木に名札をつければ、孫が見たとき、うちのじいさんは死んでからやっと共働のまちづくりをやってくれたか、とそういうことができると思う。そうするとお金もいらないし非常に良いと思う。

質問者Ｌ：　私は何度か対話集会に足を運んだが、それぞれの校区公民館での発言のなかで、小郡のまちづくり、その発展のためには人材が一番重要なので、市の内外から求めていきたいということと、人材育成をしっかり図っていきたいという話が繰り返し出ている。加地市長が市長選を戦って、非常に大勢の人が応援して、さあ小郡を変えようということで、素晴らしい運動を展開したが、その方々が残念ながら全員が全員、この加地市長の市政が始まってから、そのブレインにはなっていないような気がしてそれが非常に残念。そういった意味で、今日、見城副市長がこの場に現れて発言、回答されていることに、私も期待をしているところである。我々も一市民として、私も小郡市を愛する人間として、まちづくりにしっかり今後も関わっていきたいと思うが、まずは、市の内外というより、小郡市役所に素晴らしい人材がいるということを、今一度考えて、ここにいる部長級の方々も素晴らしい経験を持っていてベテランであるし、また、私の知り合いの子どもさんたちも市役所に入った方が何人もいて、その方々もしっかり小郡市の将来を見据えながら小郡市のために一生懸命頑張っていることをよく知っている。だからまずは、市役所

の中、そしてもう一つは、素晴らしい人材が市議会議員のなかにたくさんいるので、そういった方々としっかり連携をとってもらい、そのうえで、一ボランティアである地域住民、市民に対していろいろな協力を求めるとかコラボレーションしていくということが必要ではないかと思う。最後に、ぜひ加地市長にその見解をお聞かせ願いたい。

質問者Ｍ：　私は聴覚障がいを持っているので、手話通訳の方に音声を頼みます。子育てや教育、高齢者の話はよく出てきているが、福祉関係のことはなかった。小郡市内のいろんなところ、あすてらすや古い体育館もあるが、福祉対策として車椅子の人が使えるようなエレベーター、そして電光掲示板というか私たちが見てわかるような、視覚的な情報が足りない。そういうところが不便だと感じている。新体育館を作るということで、話があったので、高齢者、子ども、みんなが使える体育館、設備が整ったという面で障がい者にも優しい、そういう体育館をぜひ作って欲しい。電光掲示板でいうと、聴覚障がい者には、例えば地震が起こったり、そういうときにパニックになる。なので視覚的な情報があると、私たちも落ち着いて行動できる。あすてらすに期待していたが、今のところ視覚的情報はない状態。新体育館にはそういう設備を作って欲しい。

質問者Ｎ：　市長の政治姿勢についてお尋ねしたい。今日の説明の中にも、最後には市民ファーストというような言葉や市民が主体というような言葉を使っているが、前任の平安市長のときにも、市民の声をたくさん聞いて市政に反映してあったのはたくさんあったと思う。例えば、協議会とか審議会とかいろんな会がある。それからホームページにも市長の部屋という中で、自由に市民の声が寄せられて、私も何回もホームページで質問をして、担当の方から回答をもらったが、加地市長になって市民が主体的ということで、以前とどのようなところが変わるのか疑問を持つ。結局は、市の考え、市長の考えを、対話集会で押し付けるというような筋ではないかと思う。どこの市町村でも県でも、当初は市民との会話、県民との対話ということをしてあるが、最終的には上からの押し付け、ボトムアップやトップダウンのようなやりかたがあると思うが、ぜひ市長が考えていることを、市長だけでなく、ここに来ている部長、あるいは市役所の課長とか市の職員に徹底してもらって、十分に市民の声を聞けということを徹底してほしい。これは市長のマニフェストの中には説明がなかったが、市の中を刷新したいとうことが確かあったと思うので、そういう面ではぜひやってもらって、市長だけが一人言うのではなく、部長あるいは課長、市の職員が全体で、市長が考えているマニフェストを徹底するということをぜひやってほしい。これは見城副市長が来ているから、是非話し合ってやってほしい。

見城副市長：　時間の関係で、一気に意見を聞いたので、最初の方と最後の方と、分からなくなっている方もいるかもしれないが、時間の関係があるので、私が答えられるのは答えて、市長にと言ったお２人は、あとでその件について市長から答えるということで、今

日の対話集会を締めたい。

まず、８つの柱を広報に掲載するということだが、今のマニフェストは、加地市長が選挙戦で出したマニフェスト。それを皆さんと一緒に揉んで叩いて混ぜ合わせて、市民のマニフェストにしていく、という作業をやります。そうしたときに初めて、これが小郡市のマニフェストになるということなので、その作業をしていく中で、広報はもちろんホームページももちろん、とにかく市民の皆さんと一緒に情報共有することが大事なので、いろんな形を通して市民の皆さんにお知らせをしていきたい。これは当然のことなので、やっていく。

道路の関係だが、これは年次計画を作ってやっているので、これを話すとちょっと時間がかかるので、要望とさせていただく。

２０代３０代の意見を聞く場を作りたいということだが、我々もそう思っているがこれが非常に難しい。居酒屋談義かなにかをすれば、ひょっとしたらできるかもしれないが、とにかくアイディアを出しながら、皆さんも考えて欲しい。よかったら私たちに知恵を貸してほしい。やりたいと思っている。

河川の改修だが、河川の改修は県とのタイアップになるので、ここで回答はできないが、十分認識をして、県とタイアップしながら、きちんとした対応ができるように、回答ができるように進めていきたい。

遊休農地の企業進出は本当にできるのかと心配の声もあるし、ＪＡともしっかり協議をしなければいかんぞというご意見だったが、そのとおりだと思う。だから、企業も十分この地に根を張って、堂々と小郡市のために、企業も市民としてやっていけるような政策を進めていかないといけないし、当然のことながら、ＪＡと連携しながら進めていくのはもちろんのこと。そのように進めていきたい。

街路樹の関係、アイディアとして聞かせてもらった。それはすぐにはできないが、そのアイディアを生かした住民が参画する形でまちの環境が良くなるというものを皆さんと一緒に知恵を出しながら考えてさせてほしい。

小郡市役所の中に素晴らしい人材がいる、職員も議員も皆がかかってまずそこからやるべきだ、という意見、そのとおりだと思う。今職員と一緒に課題の整理をしている。その中で、素晴らしい職員がたくさんいる。皆さんに褒めてもらうような職員ばかり。必ず成果を出したいと思う。もちろん皆さんが選んだ議員の皆さん方なので、議会とも当然ながらすり合わせをしていきたい。これはお約束したい。

体育館に福祉関係諸々のものを十分反映させた計画を作って欲しいということだが、これはもう時代の要請である。逃げられない。やる。当然のことながら、障がい者も、２０２０年にパラリンピックがあるのだから、当然そのような体育館づくりを目指したい。

最後に、このような対話集会をして何がどう変わるのか、結果的に同じじゃないかという意見だが、ならないように私たちは努めていきたい。ただ１点だけ、どんなことが起こるのかということを、申し上げたい。例えば、公園が小郡市にたくさんある。これを役所

が作ると、公園のプロフェッショナルの設計会社に頼む。そうするとだいたい何をもってくるかというと、すべり台があってシーソーがあって砂場があってと、小郡市のどこへ行っても同じ公園になる。その位置がちょっと違う、大きさがちょっと違う、そういう感じ。ところが、よく考えてみると、その地域が高齢化しているところに、シーソーがあってどうするのか、そんな公園だったら、シーソーをのけてしまって、グラウンドゴルフ場にしてしまえとか、あるいは使ってない端の方だったら市民農園にしてくれよとか、そういうことが実はひょっとしたら公園という考え方になるかもしれない。そういう公園があってもいいと思う。あるいは逆に都心部で、小さい子どもとお母さん方が遊べる公園と考えたときに、やはり鉄棒にはぶら下がらない。今のお母さん方は日焼けするのがいやなので、大きな複合的な遊具を置いて、お母さん方が周りから見られるようなそんな公園があったらいいじゃないかと。つまりこれが、そこにいる市民の皆さんが決めたらその構想を市が受け入れて、そして設計をしてこういう公園でいいかと返して、それでいいということならそれで工事をする。そしてその代わりに約束だが、市民の皆さんのニーズに合わせて作った公園だから、それは使ってもらわないといけない。そういうように、地域地域の特色、あるいは地域地域のニーズによって、物事が変わっていく。そういうことが見えるような形で今から進めていきたい。これは一つの例である。こういうことを皆さんに問題提起をして、それを具体化していきながら、進めていきたい。どうぞ、今日来てなんかつまらなかったなと思わないで、今後もこういうことを、テーマを持ってとかいろいろやるので、どうぞお付き合いいただきたい。それが間違いなく小郡の発展につながると思う。最後に変わるというフレーズを使っているが、変わるということは実は、合わせるということだ。そこに住んでいる人に合わせる。そしてそこの人たちが求めているニーズに合わせる。そういうことを、対話を通じて作業としてやっていきながら、行政を経営していきたいと思っているので、あきらめないでどうぞお付き合いしてほしい。最後に市長ということなので、市長の方から締めてもらいたいと思う。

加地市長：　特に市長にという質問で、人材の育成のことと対話集会のことと２点お答えしたい。市役所の中も、今申し上げたように少しずつ変わっている。図書館のことについてもそう、私が直接やれと言っているわけではなく、私がこのような形で活用したいと図書館員に話をしたら、自然にそれを受けて学習机を出してもらった。広報おごおりも、実は変わっている。写真もトップ記事も今回の震災の写真から入り、戦争への思いというのを特集で書いている。これも、小さな変化ではあるが、広報する人間が今までは行政情報だけを流していたが、思いを伝えたいというその変化の表れである。窓口業務、まだまだ怒られることもいっぱいあるが、そうした中でも、市役所の対応、昼休み行ったけどよくやってくれたという声ももらっている。小さな変化が今少しずつ起きている。市役所の仲間、みんなの力を発揮するために１２０％やるのは私の役目だし、一緒に幹部とやっているところ。そういう能力を、今までなんとなく市民に向かうサービスというのが意外とわ

からなかったのではないかと思う。こういうことをすれば、市民の人は喜んでくれる、そういうことを今少しずつチャレンジしていっているので、逆に市民の皆さんは、変化を見てもらって、これは良かったという評価を直接伝えて欲しい。皆さんに、ある面では、市役所の人たちを育てて欲しい。そうすることで、良い方向に良い方向に、どんどんどんどん、大きなうねりが起きてくるのではないかと思う。そうすることで、さまざまな市役所の職員能力を１２０％活かしていく、当然市議会の皆さんとも一緒に話をしながら、あるべき姿、私たちの方向が間違っていたらしっかりとそれをチェックしてもらう、専門的な立場で議会で話してもらう。そうした中で、市民の皆さんとのコラボも当然していく。ただ順番はない。どれも並行に一緒にやれることを少しずつ手をつけていく。そうした中で、気が付いたら皆がこれに参加して、大きな、小郡を変えるというものの中に、皆さんが入ってもらったら、そんな環境にしたいと思っている。

まずは、こういう対話をしなければ、市民の皆さんと始まらない。今回対話集会で回っていて、一番私たちがうれしかったのは、「幹部の皆さんの顔がこんなだったのか」とか、「初めて幹部を見た」という声が多く聞かれた。私たちが表に出て答えるというのは、当然批判も受けるわけだから、勇気がいることだ。ただ少なくとも直接声を聞いた以上は、責任を持って答えていくというのが私たちの姿勢である。ここからでなければ始まらない。厳しい言葉もしっかり受けながら、答えていき、そして対話というところに自ら身を置きながら、皆さんと一緒になって、皆さんの感覚を肌で感じながら一緒に問題を解決していく、共にやっていく。その姿勢をしっかりととっていきたいと思っているので、ぜひ理解いただき、今後もさまざまな機会を設けていくので、どうぞいろんな形で、小郡市政について注文、意見を寄せてほしい。